

第3回 鶴岡市内の県立高校再編整備に係る関係者懇談会 記録（概要）

- 1 日時 平成30年10月23日（火）14:00～15:40
- 2 会場 鶴岡市第三学区コミュニティセンター 大ホール
- 3 参加者 委員 阿部敬子、岩田瑛子、尾形圭一郎、小川雅子、菅原弘昭
高橋たず子（欠席：藤野淳）（五十音順、敬称略）
事務局 柿崎教育次長
須貝高校改革推進室長、伊藤高校改革推進室室長補佐
奥山高校改革主査、丹野高校改革主査、安達高校改革主査

4 内容

- (1) 県教育委員会あいさつ
- (2) 説明・報告
- ① 第2回懇談会における意見聴取及び意見交換の概要
 - ② 併設型中高一貫教育校の評価・検証結果の概要
 - ③ その他
- (3) 協議
- ① 鶴岡市内の県立高校再編整備案について
 - ア 鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合
 - イ 加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）
 - ② 庄内地区への併設型中高一貫校の設置案について
 - ③ その他
- (4) 連絡

5 発言要旨

- (2) 説明・報告
- （委員）
- 全国の調査において、中高一貫教育校ですでに廃止されている学校があるようだが、その理由をわかる範囲で教えてほしい。
 - ウィークリーコンパスの三点固定とは何か。
- （事務局）
- 廃止されたのは連携型が多い。連携型は、比較的人口の小さい町等に設置されることが多く、少子化により中学校の規模が小さくなる、または連携する高校が統廃合になるなどの理由があるようだ。中等教育学校が廃止されたケースについても、比較的人口の小さい町等に設置され、入学者の減少により廃止になったようだ。
 - 三点固定とは、生活リズムを確立するために、「起床時間」「家庭学習の開始時間」「就寝時間」の3つの時間を毎日固定することである。
- (3) 協議
- 鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合案について**
- （委員）
- 高校教育として、田川地区の子ども達にどんな力をつけるのかが大きな視点となる。社会に送り出していくために、どのような高校をつくるのかを考えていく必要がある。鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合により、適正な学校規模の確保、切磋琢磨できる環境、競争できる環境を設けることができる。今後、規模が大きな学校を作るのであれば、県内最高の進学実績をこの地区から出す、又は施設も今までにないものとなるよう充実させるなど、魅力のある学校づくりが大切だと考える。これまで鶴岡南高校と鶴岡北高校では、進学指導や授業のレベルにおいて、それぞれ独自のものがあると思われるが、両校でのこれまでの優れた指導を生かしながら、生徒

を社会に送り出す学校になればと思う。統合に向けて、学級減が進むと思うが、今年度の学級減により鶴岡北高校では授業のやり方が変わり、部活動も縮減されていると聞いている。学級減が加速して、当該校の生徒の不利益にならないような環境整備が必要なのではないかと思う。

(委員)

- 生徒の減少に伴い、統合は避けて通れない問題だと感じている。仮に両校の統合を進めていくとすると、これまでの両校の伝統や実践が継承されていくことが非常に大切になる。鶴岡南高校ではSSHや小中高大連携による英語教育、鶴岡北高校においては合唱や新聞づくりなど大きな成果を上げてきた。さらに両校に共通することとして上級学校への進学についてもこれまで多くの実績をあげるなど、特色のある教育実践がなされ、成果を上げてきた。そうしたこれまでの特色ある教育課程や教育活動を大事にしながら、1+1が2以上になるような学校づくりへのビジョンを明確にもって進めていく必要がある。

(委員)

- 高校での子ども達の適正規模での教育活動ということを考えてときに、将来につながる豊かな学びの質ということを見ると、少子化の現状からみて、統合した方が子ども達の学ぶ場という点においては、優れたものになっていくと考えられる。ただ、両校の伝統、OB・OGが大事にしてきた特色ある教育がある。それぞれの高校で誇りをもって今まで培われてきたものがあるので、同窓会等にも丁寧に対応をして調整を図りながら、双方が納得をして、統合後も「統合して良かった」という気持ちになれるように進めていくことが大切である。最も重要視すべきことは、一番の主演であるその高校に入学する生徒が豊かな教育を受けることができるよう、どのような学びを与えられる高校にしていくのかということをお大事にしていくべきである。

(委員)

- これからの田川地区の子どもの数の減少により、統合はやむを得ないと思う。地区全体の子どもの数が千人を切るような規模になることが予想され、田川地区に進学校2校は多いという話も意見聴取であった。今までの鶴岡南高校と鶴岡北高校に比べて、進学、就職といった幅広い希望をもった生徒が、同じ学校内に集まる大きな進学校になるかと思う。その中で、学力差についてどういった形で指導していくのが懸念され、就職についても今までのノウハウもうまく活用して、適正な指導をしていくようお願いしたい。

(委員)

- 生徒数の減少による学校の小規模化、県教育委員会が聴取された意見などからして、県教育委員会の案で進めることに理解が得られるものと考えられる。しかし、伝統ある2校であるので、それぞれが地域に果たしてきた役割、実績には確たるものがある。これを統合後もいかに生かして残していくことが、これから検討していくにあたり大事だと考える。単なる統合ととらえるのではなく、新しい学校として、どんな理念の学校づくりをするのか、これからの、この地域の将来を見据えて十分論議をしてほしい。

(委員)

- 鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合案については、生徒数減少を大きな要因として、やむを得ないという意見であった。ただ、統合にあたっては、子ども達が不利益にならないように統合していき、両校のこれまでの伝統、特色ある教育活動、地域に果たしてきた役割などをいかに継承していくかが大切である、という強い意見があった。さらに新しい学校の理念として、どのようなものを創造していくかということをしっかり検討していくということ、2校が統合された規模で想定される学力差や多様な進路に対する指導についても丁寧に検討すべきという意見があった。

加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合案（校舎制導入）について

（委員）

- 加茂水産高校、庄内農業高校ともに専門学科の高校であり、特に、加茂水産高校は県内唯一の学校、庄内農業高校は庄内地域の中でとても特色のある教育活動を行ってきた高校である。また、それぞれの学校での学びを通して、自分の関心意欲態度を高めて、実践力や協調性、持久力、探究力などを伸ばしながら、地域で活躍する、又は上級学校へ進学している生徒もたくさんいる学校である。普通科の生徒とは違い、教室の学習だけではなくて、実習を通して能力を伸長するという役割を担っているの、できるだけそれぞれの学校で長く単独で実践が続けば良いが、将来的に生徒が集まらないといった場合には、鶴岡中央高校への統合もやむを得ないのではないかと思う。ただし、その場合でも、総合学科の中の系列にするのではなく、専門学科として維持していくことが必要である。制度上の問題はあがるが、他県では1学級40人という定員ではなく、県全体としての農業教育、水産教育、その他の教育を広く見て、募集定員を弾力的にしたり、2次募集などを行いながら定員割れをしないような施策をしたりしている県もあるようだ。制度上の問題で難しい部分もあるかもしれないが、それぞれの学校が存続していけるような方法もないのかと思う。校舎制については、それぞれの実習を行う日だけ生徒が実習施設のある校舎へ行くという形態と生徒は実習施設のある校舎に通い、普通科目の教員がそれぞれの校舎に出向いて行くという2つの方法が考えられる。それぞれのメリット・デメリット等を検討しながら、どういった形態が良いのか、慎重に検討していく必要があると考える。

（委員）

- 生徒数の減少、学科のバランスから考えて、この統合は致し方ないと感じている。統合を進めていくとすれば、庄内の産業振興に欠かすことができない水産、農業の専門性をきちんと保証していくことが非常に大切である。そうした中で、1次産業を主としながらも6次産業化という視点も広がってきている。1次産業の多様化が求められている時代であるので、他の科との連携による多様なカリキュラム、学習プログラムを設置することにより、これまでにない学びやこれまでの学びを広げるなどの視点も期待できる。さらに、幅広い進路選択ということも期待できると思われる。

（委員）

- それぞれ専門性がある高校も入った統合ということで複雑な面もあるかと思うが、考えようによっては、多様なカリキュラムを組むことができる魅力ある学校を作っていけると考えられる。縦割りのカリキュラムではなく、鶴岡中央高校の総合学科において、水産や農業なども体験できるようなカリキュラムにしていくことで、興味が湧き、深く学びたいという生徒も出てくるかもしれない。また、資格を取得できることが特に強みとなる学校になるのではないかと思う。庄内においては、地元の産業と密着した高校となり、専門性があり、資格も取得できる、そして興味関心があれば実際に体験を行いながら将来の職業につなげていけるような高校になっていく可能性がある。ただ、校舎が離れており、施設の利用、存続の経費、教員の配置等の課題をどのように解決していけばいいのか検討が必要になってくると考えられる。

（委員）

- 特色のある水産と農業の2校が鶴岡中央高校に統合することは、高校の小規模化による教員の配置などを考えると、やむを得ないのではないかと思う。校舎制については、カリキュラムの多様化を考えると、鶴岡中央高校の校舎に生徒が通うことも良いが、漁業関係者の聞き取りにあったように、水産に関しては海という環境が

必要不可欠であり、できるだけ今の加茂水産高校、庄内農業高校の校舎で学ぶ時間を多く取れた方が良いと思う。教員の負担は大きくなるが、鶴岡中央高校のカリキュラムとも連携が取りやすくなるなどのよさもあると思うので、校舎制についてはこれから慎重に考えていかななくてはならないと思う。

(委員)

- 加茂水産高校、庄内農業高校の両校は、これまで有為な人材を育て、この地の産業を支えてきたことを考えると、単独校として残すことができないことは非常に残念な思いもある。しかし、これまでの資料などで、このままいけば専門性の確保は難しいという指摘があったので、鶴岡中央高校への統合によって、基礎と専門性の両立を図り、これまでにない新たな連携を取り入れた特色のあるカリキュラムを組むといいのではないかと考える。この両校の魅力向上については、鶴岡市から県に対して重要事業として要望してきた。校舎制という形になっても、庄内以外からの生徒が集まるようなこれまでにない魅力を発信できる学校づくりをしてほしいと思っている。特に水産については、県内唯一であり、この地でなければできないことである。これまでも市から県に寄宿舎の整備を要望してきたが、これについても検討していただきながら、より魅力にひかれて多くの生徒が集まるような努力をお願いしたい。

(委員)

- 第2次計画(案)にあるように将来的に小規模化した場合についての方向性には賛成である。その場合、総合学科と専門学科は全く違うものなので、「農業科」「水産科」は維持すべきだと思う。総合学科の系列になったら、専門性はほぼ失われるのではないかと懸念がある。校舎制はそのことを踏まえて、慎重に形態を検討した方がよいと考える。県内唯一の専門学科、庄内唯一の専門学科として維持できるように、例えば他県で行っている募集定員を弾力的にしたり、2次募集を行ったりするなど、将来を展望して様々な高校教育を子ども達に提供できるような配慮も必要なのではないかと思う。

(委員)

- 少子化や産業界の様々な動きの変化に伴う定員割れ等の事情により、統合していくことについてやむを得ないといった意見であった。統合により、カリキュラム等の工夫することで新しい魅力をもった教育課程ができ、新たな仕事を創出できる人材を輩出できるなど可能性が広がるといった意見があった。一方で、実習施設を必要な時だけ使うという校舎制に対しては、校舎の経費や教員の手配等の問題があるが、水産、農業は実習施設がなければ重要な教育内容ができないので、時間や設備の問題なども検討すべきという意見があった。さらに統合したときには、専門性を確保した学科を開設してもらいたいという意見があった。

庄内地区への併設型中高一貫校の設置案について

(委員)

- グローバル化や多様化を考えたときに、児童・保護者にとって、庄内地区に、探究的、主体的、協働的な学びを深める場として、中高一貫の学びという選択肢ができるということは、プラスに捉えていいのではないかと考える。ただし、配慮していくべき点がある。1点目は、小学校高学年の児童が保護者とともに、選択をしなければならない場面で、何をもってどちらを選択するのか迷ったときに、併設型の中高一貫校でどんな学びができ、それが公立の中学校での学びと何が違うのかを具体的に児童・保護者にもわかりやすく、時間的余裕をもって提示をしていく必要があると思う。加えて、受検をすることへのプラス面、また負にはたらくかもしれないという面を、東桜学館中学校の事例などにより、可能な限り具体的な情報提供を行いながら、進路に対して、自分が選択したとそれぞれが前向きに考えられるよう

にしていきたいものである。もう1点気にかかるのが、中高一貫校に多くの入学者が出て、近隣中学校において学級減が起きてしまった場合に、教員の数が減り、地元中学校を選んだ生徒に不利益が生じるのではないかという不安感を周辺の中学校の生徒や保護者に与えたくないということである。教員の定数は学級数によるので致し方ないのであれば、特例的に教員の加配をするなど、影響を最小限にできるように配慮などができるとありがたいのではないかと思う。

(委員)

- 中高一貫校は、子ども達のチャレンジする力や能力を伸ばすことができるととても良いものだと思う。それが庄内地区にできることで、小学校卒業時点で子ども達の進路選択の幅が広がることはとても良いことだと思う。ただし、周辺への影響が気になる。市内の唯一の公立の進学校になる統合校が中高一貫校となり、大学進学を目指す自主性、主体性の高い子どもが進学するとなると、その人たちが抜けたことによる地元中学校のギャップは、村山に比べて、庄内は学校数が少ないので、影響は大きいのではないかという懸念がある。高校入学段階での進路選択の際に、公立の普通科の学力差がかなり大きくなると思われる。酒田市からも通う生徒が出てきた場合に、中程度の学力の子が選択できる普通科の学校の倍率が高くなるのではないかと思う。現在、東桜学館高校において、内進生と外進生が一緒になっていないので、中高一貫校の高校の状況がイメージできず、現段階で意見を言うのが難しい。中高一貫校ができることにより、子どもの力を伸ばせる事には大いに賛成だが、個人的には不安の方が大きく、立場を定められないでいる。

(委員)

- これまで、中高一貫校の設置については、鶴岡市が県に対して要望してきた。要望については、現時点でも変わっておらず、今後も変わることはない。また、丁寧な説明をお願いしてきたことに関しても、これまでの懇談会等で様々な意見聴取等がなされ、声を聞くことができ、大変感謝している。県教育委員会案に対して、様々な関係団体から理解を示し、賛同する声が多くあった。当事者となる保護者の方々から懸念する声もあったことも事実だが、期待を示す意見も多く寄せられていることもわかった。中高一貫校の設置が、他校の統合も同時に進めるということであるので、この懇談会で示された対案については、実現することは難しいと思う。以上のことから、県教育委員会案への理解が深まり、計画とおりに進められるのが良いと考えている。課題となる点としては、校舎の改修について、最小限とするのではなく、それぞれの校舎に中高一貫の特色が見えるよう最大限の努力をお願いしたい。また、校舎一体型であろうとなかろうと中高一貫教育には、課題があることがわかった。しかし、中高それぞれがメリハリをつけて教育実践を進めていくことが大事だということには変わりないと思う。6年間のカリキュラムの特色や効果的な交流によって、生徒相互が学び合うソフト面での魅力づくりをしていってほしいと思う。この地域にある新たな学校として、地域の声をできる限り反映させ、本市の豊富な教育資源を生かしながら、この地ならではの、この地でなければならない学校となるように今後議論を重ねてほしいと思う。

(委員)

- 県教育委員会案に賛成である。これまでの資料でも、成果や課題が整理されているので、課題は克服しながら設置していけばいいのではないかと考える。今回は、中間検証であったが、今後の検証では、新たな課題や、成果が出されるのだろうと思う。また、他県の検証結果をみると、進学実績でも成果が出ているとのことだったので、魅力ある学校にしてほしいと思う。

(委員)

- これまで、中高一貫校に対する課題や期待されることが話されてきた。今回、新たに東桜学館中学校に関わる資料により、中高一貫校の良さについて、改めて実績

等を見ながら感じる事ができた。実際の生徒の様子を見ていないところもあるが、非常に特色ある学校が作られているということが理解できた。ただし、近隣の小中学校への影響をみても、すべてにおいて問題なしというわけではなく、いろいろな部分で課題も多く抱えているということも分かった。この点については、今後も検討を重ねていく必要があると思われる。しかし、進路選択の幅が広がる、個性の伸長や可能性が広がるといった魅力は大切にしていけるべきだ。設置にあたっては、より広い範囲での募集になることから、他地区の声にもきちんと耳を傾けながら進めていく必要がある。それらを踏まえながら、中高一貫校を作るとするならば、どんな特色があり、どんな理念の学校とするかが大切である。地域に合った、地域に根差した学校でなければならない。

(委員)

- 庄内地区への併設型中高一貫校の設置案については、子ども達の才能を伸ばす機会となるなど、県教育委員会案に対して賛同の意見であった。運用にあたっては、東桜学館が近隣に及ぼした影響より、大きな影響が懸念され、東桜学館とは異なる新たな課題もあることを踏まえて、慎重な検討が必要であるとの意見があった。校舎については学校の理念や教育の特色に合わせて必要な改修がなされ、教育効果が発揮できるよう設備面での検討が必要であることや、他の地域からの理解も必要であるとの意見もあった。また、小学校からは、受検するにあたり、何を基準に、いつ判断したらいいかなど、具体的な説明を求める意見などがあった。